

《研究ノート》

多数派内少数者の影響力：予備的考察

守 矢 翔・藤 井 大 児

1. はじめに

本研究の目的は、多数派 (majority) に対する少数派 (minority) の影響力の源泉を考察することであり、先行研究をもとに仮説構築を行い、探索的な計画実験を行うものである。

集団的意思決定の場面で、ある意見が取り上げられ、また別の意見が軽視されるのは、どのような要因によって決まるのか。亀田・村田 (2000) は社会的動物であるヒトの行動について、ミクロー・マクロの相互規定関係という観点から、例えば個人の属性や集団内部での役割期待、個人間の関係性、集団レベルで共有される目標などの影響を取り上げている。そこでは集団が意思決定する際の多数派・少数派の相互影響関係についても考察されている。中でも少数派の多数派に対する同調行動を取り上げたアッシュの実験は、組織行動論の中でも最も知られた実験の1つである (Asch, 1951)。

他方、少数派の多数派に対する影響力に関する考察は、少なくとも組織行動論の文脈でそれほど一般的ではなかった。モスコヴィッチらの実験によれば、少数派が多数派に影響を与えるには、行動様式の一貫性が必要であると指摘されているけれども、結果はそれほど強力なものとは言えず、また我々の日常知に照らしても、あまり成功の見込みのないもののように思われる (Moscovici, et al., 1976; Moscovici, et al., 1980)。例えば多数派の意見に対して、自身の見解の一貫性のみで闇雲に立ち向かっていくことは決して賢い戦術であるとは思われない。その一方で、最初から形勢が不利である少数派の意見が全く一顧だにされないとするれば、集団的な合議の意義が薄らいでしまう。民主主義的な合意形成を重視すればするほど、難しいとは知りながらも少数派の意見をどのように反映させていけば良いかを真摯に考えなければならなくなる。

以上のことから、少数派の意見が集団全体の見解として多少なりとも反映されるためには、それがいかにして可能かを考察する意義は小さくないと考えられる。そこで集団的意思決定の過程を、大きく2つの下位集団の間でそれらの量的構成が著しく偏っている場合に限定し、実験的狀況において少数派の影響力がいかにして発揮されるかを分析する。まず第2節では、多数派・少数派の影響力に関する先行研究を挙げ、第3節では少数派の影響力の源泉について仮説構築を行う。第4節では実験の計画、結果、結果の考察を報告する。最後に、この研究の要約と今後の展望・課題について述べる。巻末には付録として、実験で使用したストーリーを加えた。詳しくは後述するけれども、この研究は実験計画法としての必要条件を完全に満たしたものとは言えず、厳密な意味で仮説検証型の実証研究とは言えない。集団的意思決定の複雑性に分け入り、多少なりとも理解を促進するために、独自の仮説を練り上げていく作業として位置付けられるものである。

2. 少数派の影響

集団内で意見が分かれ、合意形成をしなければならない時、多くの場合、少数派は多数派の意見にすり

寄るという現象が起こる。これを同調といい、田崎（1982, 1992）は、他者や集団から心理的圧力を受けた際に起こるものとみなした。すなわち個人が、自己のもつ認知・意見・態度・行動と集団の規範あるいは他者が示す標準との不一致を認識し、集団あるいは他者からの圧力を感知して、その規範や標準に合致するよう自己の認知・意見・態度・行動を変化させることと定義した。こうした同調行動を確認できる、よく知られた実験がアッシュの同調実験である。

人間が自分1人であれば間違えることのない、非常に簡単な認知的判断を行ったとする。ところが自分以外の他者がそばに居合わせて、自分とは異なる判断をした場合、その人はどのような行動を示すだろうか。この場合、多くの人がその場の多数派の意見寄りの判断をすることが知られている。アッシュは実験の中で、被験者に対してスクリーン上の左側に1本の線分（標準刺激）を映し、右側に長さの異なる3本の線分（比較刺激）を映した。それを見て、被験者は左側の線分と同じ長さの線分を右側の3本から判断するよう実験者から指示された。

この時被験者は、他の7人の回答者と同時に判断することを求められたが、この7人はサクラとして用意された回答者であり、18試行中12試行は誤った線分を選ぶようあらかじめ指示されていた。回答する順番はサクラの7人が先で、被験者が最後という順番であった。7人の回答を聞いた被験者の回答がどうなったかを観察することが、この実験の主たる目的であった。この実験の結果、被験者は32%の誤った判断を示した。すなわち明らかに簡単な認知的判断であっても、知人でもない多数派の判断に影響され、自身の判断を（意識的か無意識かを問わず）変化させたことになる。

他方、少数派が多数派に影響を及ぼすことはないだろうか。以下には、少数派の影響力の源泉を探ったいくつかの先行研究を挙げる。

(1) Moscovici, et al. (1976) の実験

モスコヴィッチらは少数派の多数派に対する影響力の中でも、その一貫した行動様式が重要であると考えた。

彼らの実験計画では、6人で1つの集団を構成し、普通であればほとんどの人が青と答えるような青緑色のスライド36枚の色を判断するというものだった。この6人の内訳は、4人が被験者、2人がサクラである。まずサクラが一貫して全てのスライドを緑と判断する条件（条件1）で実験を行う。次にサクラが36枚中24枚が緑であると判断する条件（条件2）で実験を行った。その結果、条件1で被験者が緑だと答えたものは、全判断中8.42%であった。条件2の場合、1.25%と条件1よりも減少した。またサクラが全くいない統制条件では、被験者が緑と判断したのは、全回答中0.25%に過ぎなかった。つまり行動様式の一貫性の強弱・有無により、少数派の影響力の増減が生じることがわかる。ただし一貫して少数派が緑と答えたところで、その影響力が1割にも満たないことは注意しなければならない。

(2) Moscovici, et al. (1980) の実験

第一の実験をさらに発展させ、より巧みな設定のもとで実験が計画された。ある色彩を数十秒間凝視させた後、急にそれを取り除くと提示した色彩の補色（色相環の対面の色）が知覚される。例えば青⇔橙、緑⇔赤といった組合せである。これが色彩残像現象である。モスコヴィッチらは被験者が報告する残像の色名の変化を知覚変化の指標として利用した。

最初の実験は被験者（サクラを含む）1名ずつで行われた。まず被験者は提示された青色スライドと、その知覚された残像の色を「黄色、黄色－オレンジ、オレンジ、オレンジ－赤、赤、赤－ピンク、ピンク、ピンク－紫、紫」の尺度上に回答した（他の人は見えない）。この測定は5回行われた。

次に、サクラを少数派の1人とする少数派群では「過去のデータによると、今提示した色は18.2%の人が緑、81.8%の人が青と回答するものです」と告げ、この教示によって被験者とサクラがそれぞれ多数派・少数派として位置付けられた。同様に、サクラを多数派（の1人）とする多数派群では「過去のデータによると、今提示した色は81.8%の人が緑、18.2%の人が青と回答するものです」との教示を受けた。サクラは一貫して緑と答え、また口頭で（他の人に聞こえるように）まず最初に回答するようにあらかじめ決められていた。青色スライドが15回提示し、被験者に色名を青か緑かで回答させた。

引き続き青色スライドが15回提示され、スライドと残像の色名を回答用紙を用いて答えさせた。その後サクラは用事を思い出したと慌てた様子で退席するので、最後に追加的に5回スライドが提示されて、被験者は1人で回答を続けた。

この結果、まず個人的な回答が許された際には、全ての被験者はスライドの色を青と回答するが、サクラとの接触後、緑との回答が5%増加した。また少数派群では残像の色が（青の補色である）黄-橙から（緑の補色である）赤-紫の方へ移行していくことがわかり、またサクラが退室後その傾向は消失した。また多数派群では残像色の移行はなかった。通常（青の補色である）橙周辺の色を記入するところを（緑の補色である）紫周辺の色を回答するという事は、色の判断が他者の判断に影響されていることを示している。少数派が判断を一貫して保持し続けた場合、多数派には無意識的とも言える知覚的な変容が引き起こされると考えられるのである。

(3) 吉山（1987）の実験

被験者4人、サクラ1人の5人から構成される集団を10集団作成した。続いて実験装置として、白いスクリーン上で5本の黒色線分が白い糸で上部の滑車から繋がれており、被験者が離れたところから線分の長さを操作できるようにしてある。被験者は実験者の指示によって、この長さを調節する。まず実験者は、線分の長さを70cmにするように指示する。この時、サクラが一貫して長めに逸脱した85cmの線分を作り続ける条件（条件1）のもと、5人同時に線分の長さを調節する。次に同時ではなく、1人ずつ線分を調整する条件（条件2）のもとでも同様の実験を行った。

実験の結果、条件1では、被験者が調整する線分の長さは、試行を重ねるごとに伸びていることがわかった。つまり、条件1の少数派たるサクラによる線分を長めに調整するという一貫した行動を目にした多数派は、その行動に影響を受けていることがわかる。条件2で、そうした傾向は減少した。したがってこの実験から、少数派の行動様式の一貫性は多数派に影響を与えたと考えられる一方で、個別の条件下ではその傾向が消えることから、同調行動の内面化は起こっていないことが示された。

3. 仮説

行動様式の一貫性のみで、多数派が少数派から影響を受けることは、それほど一般的ではないように思われる。

まず自明のことだけれども、上記に挙げてきた少数派研究の実験状況は、日常の状況から大きく逸脱している。日常生活で集団の意思決定を行う際、その結果次第で自分自身の生活が左右される可能性がある以上、人々の行動様式は上述のような実験状況で見られる（線分の長さや色彩の認識の）ような淡白なものばかりではなくなるだろう。より現実的な状況を想定すればするほど、個人的な価値観や意見を表明するであろうし、集団内での個人の立場・利益を追求するようになるはずである。

またモスコヴィッチらの実験を見ると、行動様式の一貫性の影響はそれほど強力なものとは言えず、ま

た我々の日常知に照らしても、あまり成功の見込みのないもののように思われる。例えば多数派の意見に対して、自身の見解の一貫性のみで闇雲に立ち向かっていくことは決して賢い戦術であるとは思われない。執着・頑固という印象を与えてしまえば、うまくいくものもうまくいかない。時には柔軟な姿勢で相手の意見を汲む必要があるかもしれない。こう考えると、いよいよ何が少数派の影響力の源泉かはわからなくなってくる。

確かに、少数派から多数派へ影響が及ぶことが可能性としてないとも言えない。最初から形勢が不利である少数派の意見が全く一顧だにされないとするれば、集団的な合議の意義が薄らいでしまう。例えば多数派に対して少数派がすり寄っていく同調圧力が支配的になれば、多数派の考え方に誤りや見落としがあった場合でも、それを正すきっかけがなくなってしまう。集団浅慮に陥ることを防ぐ上では、集団的意思決定における見解の相違や意見の衝突は健全ですらあるというのが、組織行動論の一般的な見方である。したがって、いわば民主主義的とも言える合意形成の過程で、難しいとは知りながらも少数派集団の意見をどのように反映させれば良いのかを真摯に考えなければならなくなる。

これらの諸点を踏まえ、少数派が多数派に影響を与える過程を仮説的に提示したい。ここで鍵となる要因は、少数派の行動様式の一貫性に加えて、その所属集団である。

まず、意見の一貫性について説明する。先述の通り、少数派の一貫性という行動様式が多数派に影響を及ぼすことがあるとしても、執着・頑固という印象をなるべく与えないようにして、他方では、一貫性が弱くその主張が適切に伝達されない恐れを回避するための工夫が必要である。したがって行動様式の一貫性が有する影響力を前提として、その効果には少数派の戦術的条件次第によって強弱があると考えられる。

次に、少数派の戦術的条件として、その所属集団の役割について説明する。序文でも述べた通り、我々のイメージする集団的意思決定の状況は、大きく2つの下位集団の間で、それらの量的構成が著しく偏っている場合であった。そこで見解の相違や意見の対立があったとして、この前提と実際の意思決定過程と対比させると、少数派の意見に比較的近い意見の持ち主が、多数派内に存在している場合がある。すなわち多数派の考えにただ漠然と賛同した浮動票的な存在もあれば、純粹に平均的な見解の持ち主であり、集団的合意に重きを置く存在もあるかもしれない。いずれの場合でも、最初から多数派とは鋭く対立する少数派の構成員たちとは明確に区別できるはずである。こうした少数派の意見をどの下位集団に属して表明するかという戦術的条件は、行動様式の一貫性と相互作用して異なる影響力を発揮すると考えられる。

たとえ自分たちの意見とは対立したとしても、それが自分たちの所属集団内部から出たものか、それとも外部集団から発せられたものかによって、その受容のされ方には大きな差があると考えられる。ボーイスカウトのフィールド実験によれば、集団内部に任意に設定された境界線によって集団間の競合関係が発生し、また共通の上位目標の設定によって協働関係が発生することが発見された(亀田・村田, 2000)。外部集団であるという事実だけで対立関係が生まれ、その逆に異なる意見の持ち主であっても「同じ釜の飯を食う」関係がその後の合意形成に良い影響を及ぼすならば、実際に個々の意見を聞いてみると、意見対立が深刻には存在しないということも十分可能である。したがって少数派はまず多数派内にいる意見が近い人(揺らぎやすい人とも言える)にまず影響を与え、それによって多数派内部に少数派側の意見をもつ者(多数派内少数者)を仕込むことによって、少数派の影響力を行使する方法が考えられる。この多数派内少数者が多数派内で一貫した行動様式を採用することで、少数派の意見を多数派の外部からではなく内部から拡大的に波及させられると考えられる。

仮説1：少数派の多数派に対する直接的影響力を高めるには、行動様式の一貫性が効果的である。

仮説2：少数派は多数派内少数者に影響を与え、その多数派内少数者が多数派内で少数派の意見を拡大的

に波及させていくという間接的影響力の行使方法がある。

以下では、少数派の行動様式の一貫性の強弱、所属集団の内外、および多数派から少数派への同調行動という3要因を考慮した計画実験を行う。この研究は、実験計画法としての必要条件を完全に満たしたものは言えず、あくまで仮説を練り上げていくプロセスに貢献するものとの位置付けである。例えばフィッシャーの三原則のうち、反復性についてはさらに標本数を増やすことができ、また局所管理は、今回大学生を対象とした実験であったのだけれども、例えば学年や性別といった層別因子についてあまり考慮がなされていない。それでもなお、今回の実験計画によって2つの下位集団に、以下で述べる多数派内少数者が存在すると、若干ながら多数派の少数派に対する同調圧力が減少し、また少数派に対する多数派側からの共感が増加することを数量的に示すことができたことは、集団的意思決定の複雑性に対する理解を、多少なりとも促進すると考えている。

4. 実証

(1) 実験の方法

- 1) 実施日・場所：2017年12月・岡山大学文法経棟20番教室
- 2) 被験者：岡山大学経済学部経営組織論Ⅱ受講者 86名
- 3) 課題：被験者は前半・後半に分かれているストーリーを読む。前半部のストーリーを読了後、被験者自身の判断に合致した選択肢に丸をつける。この回答によって、被験者が多数派・少数者のいずれに所属するかが決定される。回答が終わったら質問紙を裏返し、後半部のストーリーを読む。この時、絶対に前半の回答を変更しないよう指示を行った。読了後、また同様の質問に対して回答させる。前半のストーリーは全員共通であるが、後半部のストーリーは4つに分かれており、ここではそれぞれ i, ii, iii, iv とする。
- 4) ストーリー：複数の友人と2泊3日の旅行に行くという架空の設定で、被験者は、前半部を読んで自身の立場を選び、後半部を読んで意見が変わるかどうかを試される。

まず前半部では、1泊目が明けて「朝から遊びたい下位集団(多数派)」と、「朝はゆっくりしたい下位集団(少数派)」に分かれること想定して、作文している。前半部を読んで被験者が回答した数値により、その被験者が多数派に所属するのか、少数派に所属するのかが決定する。回答はリッカート尺度法を用い、1または2を選択したものは多数派になり、4または5を選択したものは少数派となる。

次に、ストーリー i では、一貫性の強い多数派内少数者の友人の意見(当初は朝から遊びたいと考えていたが、少数派の意見にも理があると強く主張する)が記載されている。同様に、ストーリー ii・iii・iv にはそれぞれ、一貫性の弱い多数派内少数者・一貫性の強い少数派・一貫性の弱い少数派の意見が記載されている。そこで被験者が答えた数値が、前半部で答えた数値と異なっている場合、後半部のストーリーに登場した友人の意見に何らかの影響を受けたことがわかる。
- 5) 質問紙：質問紙は両面印刷されており、表面には全員共通のストーリー(前半)が記載されており、その下に「1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい」のリッカート尺度による回答欄が用意された。裏面は、ストーリー(後半 i～iv)の4つのうちのどれか1つと、リッカート尺度法による解答欄が記載されていた。詳細は付録を参照されたい。
- 6) 手続き：まず研究倫理の観点から、実験者は教室内の被験者に対して、この質問紙調査がゼミでの卒

業研究のためである旨を説明した。続いて実験者は、被験者がストーリーとは関係ない「今ここに居る人々」の影響を受けないように、必ず隣席と距離を取るよう教示した。被験者の性別や学年については、今回不問とした。

さらに「前半部・後半部のストーリーに対する純粋な反応をデータ化する必要がある」ために、後半部に進んだ後に前半部を振り返って読まないよう強く指示した。実験者は、補佐役のその他ゼミ生とともに、4パターンのストーリーが記載されている質問紙を被験者一人ひとりにランダムに手渡しで配布した。実際には4つのストーリーが i, ii, iii, iv と並べられた質問紙を上から順番に配布していったので、標本全体がほぼ均等に4つの群に分割されたことになる。全員の手元に質問紙があることを確認後、全員同時に回答を開始した。研究倫理の観点から、被験者から回答を回収した後、実験者は研究目的を説明した。

(2) 実験結果

被験者86名のうち、60名が多数派側である「(朝から遊びたい) 多数派」を選択し、24名が「(朝はゆっくり過ごしたい) 少数派」を選択した。被験者の人数配分が、当初の設定が有効であったことを物語っている。

ただし多数派・少数派のどちらの立場でもない3を選択した2名は、今回は標本から外した。今回は多数派・少数派という明確に差別化された下位集団の存在という非現実的仮定を措いたための措置である。しかしこの点が、分析結果に及ぼす影響については今後要検討である。というのは、おそらく彼らは浮動票的な存在か、個人より集団的合意を重視する存在かであり、強力な個人的主張もなかりうかと推測される一方で、ストーリーの中で描かれている多数派内少数者の友人としての役割を実際には担い得る人々かも知れないからである。今回の実験計画では、漠然とそうした友人の存在を読み取らせることで被験者の反応をデータ化しているため、上記のような「実際に自分たちのうちの誰かが多数派内少数者である」という、より現実的な実験状況を想定することはできなかった。

被験者全体によって選択された値の平均値を表1にまとめた。 $t(84) = 1 - 2.5021 > 1.988$ ($P = 0.014 < 0.05$) だったことから、前半と後半の選択された値に、有意確率が5%未満で統計的に有意な差があった。

表1 分析結果：多数派・少数派の構成

	ストーリー	平均値 総計		
		前半	後半	変化量
全 体	86名	2.37	2.57	0.20
多数者群	60名	1.53	1.83	0.30
少数者群	24名	4.42	4.29	-0.13

この表では、平均値が5に近づけば被験者の所属集団の判断が少数派寄りの意見に近づき、1に近づけば多数派寄りの意見に近づくことを意味する。したがって変化量が正の値を取る場合は、少数派寄りに、負の値を取る場合は多数派寄りになるということである。86名の所属集団の最終的な意見は、全体的に見ても、また多数派の変化量に着目しても、少数派寄りの意見へ近づいていることがわかる。他方で少数派では、多数派寄りの意見への同調行動が観察された。次に、ストーリー（後半部）i・ii・iii・ivを読んだ後の被験者群の平均値について表2にまとめた。

ストーリー i は、4つのストーリーのうち最も変化量大きい。すなわちストーリーに登場したキャラクターの影響を被験者らが最も強く受けていることを意味する。また、多数派は少数派寄りに意見へ合わ

せていっているが、少数派は自身らの意見を一層強く主張する傾向がうかがわれた。ストーリー i に登場したキャラクターは、一貫性の強い多数派内少数者という設定であったことから、我々の仮説を支持する結果となった。

表2 分析結果：ストーリー（後半）を読んだ後の反応

ストーリー i 平均値					ストーリー ii 平均値				
		前半	後半	変化量		前半	後半	変化量	
全 体	22名	2.59	3.05	0.46	全 体	23名	2.04	2.22	0.18
多数者群	15名	1.67	2.27	0.60	多数者群	18名	1.39	1.72	0.33
少数者群	7名	4.57	4.71	0.14	少数者群	5名	4.40	4.00	0.40

ストーリー iii 平均値					ストーリー iv 平均値				
		前半	後半	変化量		前半	後半	変化量	
全 体	21名	2.57	2.95	0.38	全 体	20名	2.30	2.05	-0.25
多数者群	11名	1.27	1.82	0.55	多数者群	16名	1.75	1.56	-0.19
少数者群	8名	4.25	4.25	0.00	少数者群	4名	4.50	4.00	-0.50

次に、ストーリー ii について、ストーリー iii に比べて全体的に多数派寄りの意見への同調を示すことが確認できる。ストーリー ii のキャラクターは一貫性の弱い多数派内少数者であり、少数派にとって外部集団内部の弱気な支援者の存在は、自身の立場を揺るがせる危険性があることを示唆している。他方、ストーリー iii については、そのキャラクターが一貫性の強い少数派であることから、ストーリー i に次ぐ影響力を有していることが示された。このことから、我々の仮説が一部支持されたことが示唆される。ただし多数派・少数派のどちらでもない3を選択した2名は、両群から外している。

最後に、ストーリー iv について、全体的に負の値を示している。このストーリーに出てくるキャラクターは一貫性の弱い少数派で、ストーリー i の反対の結果を示したことから、我々の仮説を支持していることが示唆される。つまり、多数派にとっては外部集団の行動様式の一貫性が弱く、これにより多数派が自身の意見への自信を高めると考えられる。他方、少数派はその立場を後退させることも意味している。

以上の傾向を要約すると、各ストーリー全体の変化量を比較すると、ストーリー i、ストーリー iii、ストーリー ii、ストーリー iv の順に数値が減少する。すなわち一貫性の強い多数派内少数者、一貫性の強い少数派、一貫性の弱い多数派内少数者、一貫性の弱い少数派の順で、影響力を発揮していることが示唆される。このことから行動様式の一貫性と所属集団の2要因について、少数派の多数派に対する影響力の源泉として、行動様式の一貫性が有する主効果に加えて、その効果を増幅させるものが所属集団であることがうかがわれる。

5. 結論

本研究の目的は、多数派に対する少数派の影響力を強化する潜在的要因を考察することであり、本論文では先行研究をもとに仮説構築を行い、探索的な計画実験を行った。

先行研究の検討から得られた少数派の影響力の源泉として、行動様式の一貫性と所属集団を挙げることができた。また集団的意思決定を、大きく2つの下位集団の間で、それらの量的構成が著しく偏っている場合を想定して、少数派の影響力をリッカート尺度で測定した。これら3要因からなる探索的な計画実験を構築して、岡山大学の学生86名を被験者にデータを収集した。その結果、少数派の多数派に対する影響力の源泉として、行動様式の一貫性が有する主効果に加えて、その効果を増幅させるものが所属集団であ

ることがうかがわれた。

以上の結果に基づいて、若干の考察を行う。モスコヴィッチらや吉山の実験によって、少数派の多数派に対する影響力は実証されてはいる。しかし計画実験の性質上、被験者らは非日常的な実験状況のもとに置かれざるを得ず、行動様式の一貫性という少数派の影響力の源泉も、線分の長さや色彩認識など認知的な判断を要するものに留まっている。これは人間の無意識レベルにまで刷り込まれた性向を描き出そうとする社会心理学的要請に応えるものであるのは言うまでもない。しかしより現実的な状況を想定すればするほど、被験者はそうした単純な刺激反応系としての振る舞いを超えて、個人的な価値観や意見を表明したり、集団内での立場・利益を追求したりといった複雑な行動を取るようになるはずである。例えば少数派は行動様式の一貫性のみで闇雲に多数派に立ち向かっていくことは決して賢い戦術であるとは言えず、またそうすることは集団浅慮からの抑止力としての健全な批判精神、ないしはそれによる社会的便益の観点から見て決して望ましいことではない。いわば民主主義的とも言える集団的合意の形成過程で、難しいとは知りながらも少数派の意見が受け入れられるための戦術的工夫が真摯に求められるのであり、単なる刺激反応系としての人間観に何らかの主体的行為能力＝エージェンシーを取り戻す工夫をしなければならぬ。

そうした観点から実験結果に底流するメカニズムを考察すると、まず少数派の行動様式が一貫すると、意見そのものの正当性や正しさに加え、同調圧力に屈しない意志の強さや頑迷さといったパーソナリティが他者の中で確立され、多数派の意見に変化を促すのかもしれない。これが主効果の背後メカニズムだとすると、さらに少数派の戦術的工夫として、所属集団の効果を考えることができる。すなわち他者の意見を聞かされるにしても、自身と所属集団が同じ人間からの場合と、外部集団の人間から伝えられる場合とでは、対応が異なるからである。特に多数派と少数派双方の協働による社会的便益が十分に大きいならば、少数派のより慎重な接近法はいわゆる民主主義的な合意形成を支える重要な戦術的イニシアティブとすら言っても良いかもしれない。

ただし本研究の計画実験は、仮説を精緻化するための探索的調査の段階に止まり、改善すべき点がいくつか残されている。そもそも今回は多数派・少数派という明確に差別化された下位集団の存在という非現実的仮定を措いたため、本研究の発見を過度に一般化することはできない。具体的には、被験者のうちストーリー（前半）を読んで多数派・少数派のどちらの立場でもないと回答した2名について、標本から除いていることの影響は検討を要する。おそらく彼らは浮動票的な存在ないしは個人より集団的合意を重視する存在であり、確たる個人的主張もなからうかと推測される一方で、ストーリーの中で描かれている多数派内少数者の友人としての役割を実際には担い得る人々かもしれないからである。

また実験条件の操作を、被験者にストーリーを読ませてそれへの反応をリッカート尺度で測定し、多数派・少数派として分類したことは、これが真に日常的な集団的意思決定の状況を代表するとは言い難いけれども、これは実験という研究方法固有の限界として仕方がないことである。ただしストーリーに登場するキャラクターが話す内容で、行動様式の一貫性の強弱を表現することがあまりに恣意的との批判はあり得ると思われる。モスコヴィッチらや吉山の実験装置が線分の長さや色彩の無意識レベルの認知に集中すべく周到であった理由は、まさにそこにある。実験状況の現実味を取り戻すことが本研究の1つの着眼であったことから、二律背反的な問題に直面せざるを得なくなっているが、それでも計画実験の設計的工夫によって克服していかなばならないところである。またストーリーを周到に作成することで、巧妙に多数派・少数派を構成することができたけれども、少数派の標本数が各群で数名程度に止まるため、統計的検定の信頼性をどう改善するかが問われてしかるべきかもしれない。特に層別因子として性別や年齢をコントロールする必要があるとすれば、標本数は多い方が良いと想像される。さらに実験結果に底流するメカ

ニズムへの考察を裏付けるためにも、実験後の質問票調査を別途用意することが理想的だったと考えられる。

参考・引用文献

- Asch, S. (1951) Effects of Group Pressure upon The Modification and Distortion of Judgments, in Guetzkow, H. (ed.) Groups, Leadership, and Men, Carnegie Press, pp.177-190.
- 亀田達也・村田光二 (2000) 『社会心理学：適応エージェントとしての人間』有斐閣。
- Moscovici, S., E. Lage and M. Naffrechoux (1976) Influence of A Consistent Minority on The Responses of A Majority in A Color Perception Task, Sociometry, 32, pp.365-380.
- Moscovici, S. and B. Personnaz (1980) Studies in Social Influence V: Minority Influence and Conversion Behavior in A Color Perception Task, Journal of Experimental Social Psychology, 16, pp.270-282.
- 田崎敏昭 (1982) 「少数者の行動と同調」『研究論文集/佐賀大学教育学部』29 (2-2), pp.165-173。
- 田崎敏昭 (1992) 「『同調』の概念についての考察」『研究論文集/佐賀大学教育学部』40 (2-2), pp.115-121。
- 吉山尚裕 (1987) 「少数者影響過程の時系列的分析」『実験社会心理学研究』28 (1), pp.47-54。

謝辞

岡山大学の学生諸氏が、講義中の貴重な時間を割いてアンケート調査に協力してくださった。心から御礼を申し上げます。

付録

ストーリー (前半)

ある日、あなたは友人たちと二泊三日の旅行へ行くことになりました。できるだけやく行き先を決め、タイムスケジュールも決めなければいけません。行き先については、なんのいさかきも起きずに決まりましたが、タイムスケジュールには、二日目の朝について1つ問題があり、朝から遊びたい人(多数)と朝はゆっくりしたい人(少数)に分かれました。

多数派(朝から遊びたい派)の言い分は、できるだけたくさん楽しみたいし、家でもゆっくりはできる。せっかくの旅行だから思い出を少しでも多く作りたいということです。

少数派(朝はゆっくりしたい派)の言い分は、朝から遊んだところで、思い出が増えるのかはわからない。あえて贅沢に時間を使って、朝はゆっくりしようということです。

この2つの意見を聞いた上で、あなたはどうか考えますか。以下の1～5のあなたの考えに該当するものに丸をつけてください。

(1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい)

ストーリー (後半 i)

一度、自分の考えを決めたあなたは、友人たちに意見を聞いて回ります。そこで、一緒に旅行に行くあなたの友人の1人に、なぜ朝から遊びたいか聞いてみたところ、以下の返事がありました。

あなた：「なぜ朝から遊びたい派なの？」

友人：「せっかくの旅行だからという理由で、朝から遊ぼうと思ってたけれど、よくよく考えたら、旅行先での贅沢な時間の使い方もわりと惹かれはじめてる。理由としては、旅行だけでなくみんなで遊ぶとなると、せわしないことが多いのもあって、今回は、普段とは違う時間の使い方をしても、逆にそれが光っていい思い出になるだろうから。だから、今は、朝はゆっくりしたい派かな。」

あなた：「個人に聞いて回っても、朝から遊びたいって人が多いけど。」

友人：「最初は私もそうだったけど、それは若干、その場の雰囲気流されてたかも。個人の考えを言っているのなら、改めて考えた方の意見で、朝から遊ぶのが決まっていやなわけではなく、朝からゆっくりしたいと強く思ったよ。」

この意見を聞いた上で、再度、以下の1～5のあなたの考えに該当するものに丸をつけてください。

(1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい)

ストーリー（後半ⅱ）

一度、自分の考えを決めたあなたは、友人たちに意見を聞いて回ります。そこで、一緒に旅行に行くあなたの友人の1人に、なぜ朝から遊びたいか聞いてみたところ、以下の返事がありました。

あなた：「なぜ朝から遊びたいの？」

友人：「自分では決めきれなかったのもある。ただ、その場で話し合った時に、だんだん朝から遊ぶ方に心が傾いていったから、朝から遊びたいって意見を出した。今1人で考えると、ゆっくりできるっていうのも魅力的だね。いや、朝から遊ぶのもいいっていうのはちゃんとあるけど、はっきりとは自分の意見が決まってないかも。」

あなた：「個人に聞いて回っても、朝から遊びたいって人が多いけど。」

友人：「やっぱりそれは変わってないよね。だったら、今回は、朝から遊びたい派でもいいかな。結局、多い人に合わせがちなどころもあるし。ただどっちもいいところと悪いところがあって、もうちょっと考えてみたい気もする。」

この意見を聞いた上で、再度、以下の1～5のあなたの考えに該当するものに丸をつけてください。

(1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい)

ストーリー（後半ⅲ）

一度、自分の考えを決めたあなたは、友人たちに意見を聞いて回ります。そこで、一緒に旅行に行くあなたの友人の1人に、なぜ朝はゆっくりしたいか聞いてみたところ、以下の返事がありました。

あなた：「なぜ朝はゆっくりしたい派なの？」

友人：「みんなは意外と朝から遊びたいことにちょっと驚いた。旅行で行くところで普段とは違う場所でしょう？結構知らず知らずのうちに疲れて溜まってると思った。それだけじゃなくて、そこで話したりすることが意外と思い出になりそうじゃない？もろもろ含めて朝はゆっくりしたい。これは各々の旅行に対する考え方が出てるね。」

あなた：「個人に聞いて回っても、朝から遊びたいって人が多いけど。」

友人：「私個人は、変わらず朝はみんなですっきりするってことに魅力を強く感じてる。こっちの意見の方が少ないのはわかってるから、妥協すればいいのだろうけれども、私はゆっくりしたいな。」

この意見を聞いた上で、再度、以下の1～5のあなたの考えに該当するものに丸をつけてください。

(1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい)

ストーリー（後半ⅳ）

一度、自分の考えを決めたあなたは、友人たちに意見を聞いて回ります。そこで、一緒に旅行に行くあなたの友人の1人に、なぜ朝はゆっくりしたいか聞いてみたところ、以下の返事がありました。

あなた：「なぜ朝はゆっくりしたい派なの？」

友人：「自分では決めきれなかったのは確かにある。ただ、その場で話し合った時に、だんだん朝はゆっくりする方に心が傾いていったから。今改めてちゃんと考えてみると、朝から遊ぶのもいいよね。いや、どっちでもいいわけじゃないんだけど、ちょっと迷いだしたから、はっきりとは自分の意見が決まってないかも。」

あなた：「個人に聞いて回っても、朝から遊びたいって人が多いけど。」

友人：「やっぱりそうなんだ。それを踏まえると、多少なりとも朝から遊ぶ方がいい気もしてくる。ただほんとにどっち派なのかって聞かれると、両方に魅力を感じてるから、もうちょっと自分で考える。」

この意見を聞いた上で、再度、以下の1～5のあなたの考えに該当するものに丸をつけてください。

(1：朝から遊びたい 2：どちらかと言えば朝から遊びたい 3：決めきれない 4：どちらかと言えば朝はゆっくりしたい 5：朝はゆっくりしたい)